森とともに生きて

今回から新シリーズの始まりです

室町時代、植林の始まり

谷　禰兵衛（林業経済史研究者）

森林の多面的な機能

森林は、人類の生存にとって無くてはならない存在であり、社会的公共資本です。『森林・林業白書』によりますと、森林の機能は多面的で、生物多様性保全機能、地球環境保全機能、土砂災害防止・土壌保全機能、水源かん養機能、快適環境形成機能、保健・レクレーション機能、文化機能、物質生産機能などがあげられています。

このうち、物質生産機能を除く公益的機能を貨幣評価すると、70兆円を超えます。実際は100兆円にも達するでしょう。物質生産機能とは木材、竹、薪炭、きのこ類などを産出することで、これらすべてを合わせると、数百兆円にもなります。

地球温暖化を防ぐために森林の役割が大きいことはよく知られています。夏、木陰に寄ると涼しく感じます。おいしい水も山や森があってのことです。昔から、洪水や土砂災害を防ぐには、山をしっかり管理しなければならないと考えられてきました。森は緑のじゅうたんといわれるように保水し、徐々に放水しています。コンクリートのダムを造らなくても、けっこうその役割を果たしているのです。

最近、よく「森は海の恋人」といわれますが、沿岸でおいしい昆布や牡蠣を育てるには、流域の森を育てなければならないことが意識されるようになりました。みなさんが登山をしたり、森林浴をするとき、美しい山や森であってほしいと思われるでしょう。これが森林の公益的機能です。

住居、燃料、土木工事、道具、船・車などの輸送機関等々、産業革命までは木材が主な原料でした。木材はすべて森林から伐り出されます。しかも、森林は採り尽くせば無くなる有限資源ではなく、持続的資源です。

山は惣有財産

室町時代、山林（森林のなかでも木材の産出を目的とした山を山林といいます）は惣村のものとされていました。

惣村とは、農民の自治組織で、いまの大字や村の原型です。惣村は百姓の寄り合いで治められ、山林の管理も惣村がおこないました。近江国の今堀では、「森林の苗木を切り取った者は、500文の罰金を科する」とか、「惣の森で若木を伐ったり落ち葉を取った者は惣から追放する」という厳しい定めをしています。このように山林は個人の所有ではなく、惣村のものとされていたのです。

住民といっても、全住民ではなく、おとな百姓といわれる百姓が権利を持っていました。おとな百姓とは、年貢や夫役（領主が課す労働）を負担する一軒前の百姓で、その代わりに、惣村の運営に参加することや森林を利用する権利を有していました。いまでも吉野の大字（区）は区有林を持っていて、共同で管理しています。これは中世以来の伝統です。盆地では、ため池を水利組合などが共同して管理しているのと同じことです。

木材の利用

吉野材は、室町時代には畿内で優良材として知られていました。吉野山は古代から修験の道場でした。大峰山上と山下吉野山には多くの堂塔伽藍が軒を並べ、最盛期には山上に三六坊、山下には百二十余坊の堂宇を数えました。また、吉野山には、鎌倉千軒、岩倉千軒、丈六千軒、広野千軒、御園千軒といった地名が残っており、大規模な住居施設があったことをうかがわせます。そのために大量の木材が伐り出されたことでしょう。吉野山は大峰山脈の北端に位置しており、用材はこの山脈北端の東西両側から伐り出されました。

文明十一（一四七九）年、蓮如上人は山科本願寺の造営に着手し、同十二年に御影堂、同十三年に阿弥陀堂を完成させました。その建設に吉野から材木が運ばれました。蓮如上人は、こう書いています。「どうしても自分の命のあるうちに御影堂を建立したいと思っていたところ、そのことを門徒らが知って、大和の吉野から材木を運んできた。また、阿弥陀堂の建立にも、吉野へ人を遣わせて大柱を用意した。」（『蓮如上人遺文』より作成）

金峯山寺蔵王堂　ここを中心に多くの堂塔伽藍や住居があった。

大坂本願寺の造営にも、吉野から材木を取り寄せています。

また、興福寺の僧が書いた『多聞院（たもんいん）日記』には、永禄年間（一五五八～七〇）吉野から曽木をさかんに運ばせていたことが書かれています。曽木というのは屋根板です。当時町屋の屋根は板葺でした。寺社でも中心的な建物は桧皮葺（ひわだぶき）でしたが、それ以外はみな板葺でした。

一六世紀は、都市発展の時代といわれるほどに、畿内では町が発展しました。大和でも、今井をはじめ上市、下市、御所などです。町の発展は必然的に木材需要を招来します。この時代、大量の木が森林から伐り出されました。

青根ヶ峯の遠望　このあたりから植林が始まった。

植林の始まり

しかも、これらの木材はすべて森林から伐り出すだけで、人間の手で植えたり育てたりすることはありませんでした。これを採取林業といいます。いまでも世界の林業の主流は採取林業です。

いくら木が自然に更新できるといっても、限度があります。自然更新を上回る速度で木が伐採されますと、当然枯渇し、裸山になります。こうして大峰山脈の北端の両側は伐り尽くされていきました。

そこで植林が始まったのです。天正一一（一五八三）年の春、吉野山の桜見物をした宇野主水（本願寺顕如上人の右筆）が吉野山の奥、青根が峯の辺りの景色について、「これより上は桜はなし、櫃桧杉ばかりである」と書いています。植林したものと見るのが自然でしょう。

明治三一年に刊行された『吉野林業全書』では、植林が一番早いのは川上郷（川上村）で、次が黒滝郷（黒滝村）としていますが、この両郷は大蜂山脈の両側にありますから、ここから植林が始まったということには合理的な根拠があります。

一七世紀になりますと、畿内の旺盛な木材需要に刺激されて、吉野の他の郷でも植林が始まります。